

おひざのうえで 2023年度⑨

(副園長の子育て応援通信)

「感動が続きます」

せんりひじり幼稚園 副園長 安達かえで



発表会には大勢の保護者の皆様にお越しいただきありがとうございました。どのクラスも子どもの数の3倍以上の方々がお越しくださいました。笑顔と温かいまなざしを送ってくださったおかげで、子どもたちは張り切って表現できたと思います。

うさぎ組は、キノコが大好きなクラス。伝説のキノコを食べると、急に寝てしまったり腰の曲がったおじいさんになったりと変身を楽しむ劇でした。なな先生が子どもたちがよくやっている表現遊びを劇に取り入れたことで、3歳児らしい可愛い劇になっていたと思います。

メロン組は、「めっきらもっきら どおんどん」の劇でしたが、しっかかもっかかとかんたが遊ぶシーンがあるのですが、サッカーや縄跳び、パラバルーンなどで遊びます。メロン組の子どもたちがよく遊んでいるものを美優先生が劇の中に取り入れて、お話の世界と日常をミックスした面白い劇になりました。メロン組らしいありのままの姿が見られたかと思えます。



ゆり組の「金のがちょう」は、笑わないお姫様の役になりたい女の子が二人いて、なかなか配役が決まらなかったそうです。すると、「だったらお姫様を二人にしたら？」という声が子どもたちからあがったそうです。ところが、「ハンスと結婚するお姫様が二人だとおかしくない？」ということになり、お姫様を姉妹にして、お姉ちゃんが結婚することにしたそうです。子どもたちは柔軟に考えますね。それを見守る佳世先生も楽しそうでした。



他のクラスでも、子どもたちの話し合いによって、配役を変えたり、必要な小道具を増やしたり、舞台に出るタイミングを変えたりとどんどんストーリーが変化していきました。そして、そんな子どもたちの主体的な姿を面白そうに見守っている担任たちでした。発表会に至るまでの過程で、他者理解であったり、発想の豊かさであったり、問題解決力や企画力そして見通す力が発揮されています。プロセスの中で育つ力がとても素晴らしくて、そんな姿に感動させられました。当日は、大勢のお客様を見て恥ずかしくなってセリフに詰まる子や舞台に出るのを躊躇する子もいましたが、その重い足取りや力の入った背中に、揺れ動く子どもの思いが見え隠れしていて、それも大切なその子の気持ちだと思いました。当日感じ取った思いが様々な形で今後にかされていくと思います。

年度末のイベントはまだまだ続きます。先日は年長組のメチャピー大会でした。ラグビーとポートボールを掛け合わせたようなスポーツです。ボールを抱えて味方陣地にパスをつないでいけたらゴールですが、次々と相手チームのタックルやボールの奪い合いになります。攻撃とディフ

エンスが目まぐるしく変わる中、激しくぶつかり転んでもすぐに立ち上がり走ります。ボールの奪い合いで折り重なるように倒れても、立ち上がってすぐにボールを追いかけます。どうしてここまで夢中になれるのか不思議ですが、激しい攻防が一種の興奮状態をもたらすのかもしれない。そんな中、子どもたちの体をコントロールする力がどんどん育っていることに驚きます。ボールをキャッチすると片手で抱え込んで走ります。タックルを反対の手でかわしながら急に体の向きを変えたり、ストップとダッシュを繰り返します。その瞬間の判断する力も驚きです。ラグビー日本代表だった堀江翔太選手が園児だったころはまだメチャビー大会はありませんでしたが、ここからラグビーの面白さに目覚める子がいるかもしれませんね。余談ですが、以前年長組の保護者から「私たちもメチャビーがやりたい」というご意見からお別れ会で保護者のクラス対抗のメチャビー大会をしたことがありましたが、お母さん同士のぶつかり合いが激しくて（お父さんは、手加減されていたのですが・・・）怪我人が出たので終了しました。



話は変わりますが、先日ある研究会で「乳幼児の数あそび」の講義を聞く機会があり、乳幼児の遊びや生活の中で、算数や数学に繋がる場面が多くみられることを再認識させられました。1・2・3・4・・・の数がただの数列ではなく、遊びや生活の中でモノや行動と結びついて数の概念を豊かにしていきます。

例えば、ハイハイができるようになった赤ちゃんが、ティッシュの箱までたどり着くと、1枚また1枚とティッシュを引き出していきますよね。今までの私の認識は、自分（子ども）が物（ティッシュ）に働きかける（引っ張る）ことで、その物（ティッシュ）が反応する（出てくる）ことが面白くて何度も試している（認知に繋がる行為）だと思っていましたが、講師の先生曰く、1回引っ張ることで1を感じ、その行為は「関数」に結びついていくことになるということ。物に働きかけることで、結果が出るということも関数に繋がる考え方に繋がるそうです。それは考えたことがなかったのが驚きでした。操作を通じて、事象が抽象化され、数学的な考えができるようになっていくそうです。そんな遊びの中の試行錯誤で数学的概念が育つので、子どもが没頭する姿を見守ることが大切です。また、数学的思考は、自然発達的には育たないので、文化的道筋と近づけるために、数や形を意識できるようなおもちゃや大人の関わりが必要だとのこと。廃品の箱を繋げてロボットや乗り物を作ったり、泥団子の土に混ぜる水の分量を加減したり、砂場のトコを繋げて水の流れる道を作ったり、お店屋さんごっこで、たこ焼きを5個ずつお皿に乗せて売っていたり、スライムを作る時の分量や割合を試行錯誤したりと、幼稚園や保育園での遊びや生活には、数や量や形に触れる経験が溢れています。多くの物の操作する経験によって、数をまとまりとして捉えることができるようになります。それを「サビタイジング」というそうですが、バーチャルではなく、物のやり取りをする中で物をまとまりとして捉えることができ、それが数学の力へとつながっていく重要な力とのこと。幼児期に遊びや生活経験が乏しいと、数をまとまりとして捉える力が育ちにくいそうですが、せんりひじりの子どもたちを見ると、数えきれないほどの主体的な活動の中で、数や形や量の操作をしてきたことがわかります。卒園した後、幼稚園で経験したことを忘れてしまったとしても、数や量の感覚的な概念は残っていくことでしょう。